



令和3年度

鹿児島県の教育

1月号

巻頭言



一般財団法人鹿児島県校長会館理事
県連合校長協会小学校長部会副部会長

日置市立伊作小学校長
下 脇 徹

ベストの環境をつくる

プロ野球日本ハムファイターズの新監督に、新庄剛志氏が就任した。派手なファッションやパフォーマンスが注目されがちな新庄監督であるが、就任後すぐに沖縄県国頭村で行われた秋季キャンプを視察し、選手への訓示を述べた後、高さを制限しての遠投やバトンリレーで選手の動きや特徴をつぶさにチェックした。また、グラウンドの整備や外野フェンスのチェック、打撃マシンの調整などにも精力的に動き、選手が練習に打ち込める環境を整えていた。

新採の頃、とある恩師から、「環境は人をつくる。だからベストの環境をつくらなければならない。」と、教わったことがある。環境には外見のものとの内面的なものがある。外見的なものは、やってみたくならないような環境づくりであり、やりたい時、頑張りたい時にその環境があるか、自分の記録や努力の跡が見られるものがあるかなどである。また、内面的なものとは、せざるを得ない環境づくりであり、お互いの切磋琢磨、教え合い、高め合いなどのことを言う。

私は、常にこの「環境」ということを意識してきた。学力向上のためのしかけや体力向上のための場や用具の整備、安心・安全に学

校生活を送るための施設設備の保守など、自ら率先して動かなければと思っている。また、行事を運営する際は、意欲をもって取り組める喜びや感動を味わえるよう、魅力ある企画づくりに努めてきた。

溝や屋上に泥が溜まっていれば取り除き、木々の葉が散らばっていれば拾い集め、玄関に砂が上がつていけばそこを掃除し、不要なもの撤去したり、壊れているものは修繕したり、児童にとっても職員にとってもベストの環境を維持するためにしなければならないことはいくつもある。

美しくきれいであればそれが当然かのように何も目立たない。しかし、散らかっていたり、汚れたりしていれば、それはよく目立つ。きれいにしたところで、だれか褒めてくれるわけでもないし、気づいてくれるわけでもないが、まずは「環境を整える」ことが大切だと考える。

新庄監督は、選手、そして、ファンのためにベストの環境をつくらうとしている。そして、現役時代につけた背番号「1」を自らがまた背負う。自分に誇りと自信がなければできないことである。今の私には誇りも自信もなく、背番号「1」は似合わないであろうが、児童、そして、職員のために、自ら率先垂範でベストの環境づくりに努めていきたいと思う。

令和4(2022)年 1月号

一般財団法人 鹿児島県校長会館

〒890-0056 鹿児島市下荒田四丁目32-13

振替 02030-1-3192

TEL 257-9676 FAX 257-9679

(有) アート印刷

鹿児島市東坂元二丁目29-1

TEL 247-1605 FAX 247-2844

* おもな内容 *

巻頭言	1	話のひろば	13
随想	2	読書案内	15
提言	3	趣味・文芸	18
わが校の学校経営	5	郷土の紹介	19
子どもが輝く教育	7	一般財団法人校長会館だより	20
心に残るひとこと	9	編集後記	20
ある日の校長講話	11		



屋久島の懐古談

「波風荒き…」の「屋久島エレジー」が卒業試験

屋久島自然館館長 佐々彰 聴

「屋久島エレジー」歌詞

略	歴
二〇一六年	一九七一年
現職	一九七五年
	二〇一二年
	伊佐農林高校卒業
	屋久島町役場勤務
	屋久島町役場退職

小杉谷事業所が開設していた昭和四十年代、下屋久営林署では、毎年数十名の職員が九州管内から屋久島に赴任してきた。そして任期の三年が終わると、また各地の営林署に転勤となる。

屋久島での最後の勤務が終わる日の夕方五時、署内の会議室に全職員が集まる。ひな壇には、いつもと違い、いっちょようらを着た転出者が座る。

署長の挨拶で、送別の宴が始まる。宴たけなわの頃合いをみて、転出者の代表が「このらで卒業試験を実施する。」と宣言。すると、おもむろにタクトを振るものが現れ、転出者の一人が唄いだす。

「波風荒き屋久の島通う汽船は数あれど…」と唄い終わると、残る職員の一部が何も書いていない卒業証書を即興で読み上げる。そして、また別の転出者が唄い、卒業証書を読み上げられる。転出者全員が唄い終わると、最後に職員一同が肩を組み、この歌を合唱する。この歌声は、会場の隅まで響き、新しい赴任地での活躍を涙ながらに祈るものだった。

その当時、屋久島に赴任した職員は、送別会

で、「屋久島エレジー」を完璧に唄うことが習わしとなっていた。

また、宴の途中では、「署長報告があります。私を含め数人が屋久島の女性と一緒に次の赴任地に参ります。」と。

ある時期、下屋久営林署の職員と屋久島の女性との結婚ブームもあったようだ。

「屋久島エレジー」の唄は、昭和十七年頃永田集落の若者が兵隊検査のために種子島へ行くことになり、最後の夜、永田の乙女たちを思っ作詞された。

この唄の碑が、永田集落の公民館裏の中地公園にある。昔は、いろいろな職場の送別会で唄われていたものである。

私は、今でも「屋久島エレジー」を聴くとその頃のことを懐かしく思い出される。



一、波風荒き屋久の島

通う汽船はずあれど
主さん乗せたあの船は
無事に鹿児島着けばよい

二、彼方にかすむは 永良部島

寄せ来る波間に浜千鳥
泣いて別れたあの人は
今じゃ何処の波の上

三、寄せてはかえす白波に

人の心が 解るなら
聞かせてやりたい胸の内
ほんにせつない恋心

四、屋久の島辺に咲いた花

その名も清き 八重椿
忘れられないあの人を
島の乙女は今日も待つ

五、昔想えば なつかしい

磯の浜辺を二人して
そぞろ歩きをしたものを
今じゃ涙の袖の露

…十二番まで続きます。



確かな『観』のある教育を

『みえ方』の相互交流で、教師の『みえる力』を高める

鴨池小(市) 福留明人

一 はじめに

「花は正直。手間をかければ結果が出るから。でも、毎年、同じようにはいかない。」

過去の記録を見て、時期や天候に気を配りながら、土作りや種蒔き、育苗等の作業を進められるKさんの言葉には説得力がある。

「水をかけるだけだったら誰でもできる。でも、ちゃんとした水かけは…」

虫や病気がないか、花や葉、茎の様子、土の湿度具合を確かめて、しっかりと根元にかけることが真の水かけだと力説される。学校の花作りに哲学を感じさせる言葉である。

二 「みる」行為の重要性

「花」を「子供」に、「水」を「声」に置き換えると、ただ、子供に声かけをすればよいというものではないことに気付く。様子を注意深く観察し、些細な変化を感じ取りながら、心に届く声かけをすることの大切さを理解できる。日々、子供にかかわる中で、「みているようでみえていない」「思い込みでみている」と反省する場面がある。『みる』行為の重要性、『みる』ための『観(子供観、指導観等)』を磨き高めることの必要性を再認識する。

三 問われる教師の「みえる力」

本校は、鹿児島大学教育学部准教授の高谷氏から指導をいただき、「省察」をキーワードに職員研修を行っている。子供とのかかわりを振り返り、自分自身の『観』を問い直す研修である。教育には、いつでもどこでも通用する指導法はなく、子供に寄り添いかわる中で、その子の状況や要因を探りながら、働きかけを常に開発し続ける営みである。

状況文脈把握…その場・その瞬間の状況を観察・把握

← 多面的解釈…生起している事実やその要因を多面的に解釈

← 即時的意思決定…瞬間的に対応方法の選定・指導計画の再編の決定

高谷氏は、「教師の『みえる力』が子供の享受できる学習を左右する」と指摘する。子供に起こっている行動の事実をどのように「みる」かが教師の資質として問われる。

また、子供を「みる」際の視点として、
ア 何が表出しているのか
イ 表出した行動にどんな意味があるのか
ウ なぜか(何がそうさせているのか 等)

の重要性を挙げている。

教材研究において、指導法の研究のみに終始し、子供の学びがどんな「順序」で、どんな内容を「関係付け」、深めていくのかを事前に想定する研究が意外と行われていないと感じる。学びの道筋の想定は、教師の「みえ方」を変え、「みえる力」を高める上で欠かせない教材研究であると考えられる。

四 「みえ方」を相互交流すること

高谷氏は、授業参観のポイントに、「別のみえ方・解釈はないかを常に考え、対話すること」「なぜ、自分にはそうみえたのかを深く考察すること」の重要性も問っている。

同じ事実を目にしても、教師によって「みえ方」が異なり、多様な解釈が出てくる。自分のものの見方だけでみてしまっていないか、先入観を持って子供の行動を解釈していないかを自覚し、他の教師から「みえ方」を謙虚に学ぶ姿勢、「みえ方」を相互交流する研修の場が必要である。「子供に学ぶ」取組こそ、今の学校現場で再考すべき課題と考える。

五 おわりに

「花はものを言わないですからね…」
Kさんの言葉が続く。子供が何も言わなくても行動から内面を「みる」ことができるか、子供の心がみえにくくなっている今の世の中だからこそ、問われる資質だと感じる。

「花作りは大変だけど苦ではないですよ」

さり気なく語る言葉に、自分ももつと子供に寄り添わなければならない思いを新たにしている。



不登校について考える

川内北中(北) 感王寺 等

一 はじめに

コロナ禍の中、全国的に不登校生徒は増加傾向にあり、本校も解決に頭を悩ませている。また、学校が落ち着いてくると不登校生徒が増える現象は、これまでの勤務校でも見られたことであり、悩ましいと感じていた。不登校の原因は様々で一概に解決方法を述べることは難しいが、取り組んでいることと取り組みたいことを述べる。

二 不登校の捉え方

不登校が人間的に成長するために必要な時間であれば、子どもの成長を待つべきである。逆に不登校の原因が明確であれば、問題を解決し登校を支援すればよいが、問題を解決したとしても、すぐに登校に結びつかないケースもあり、簡単にはいかない。また、原因の線引きも難しく明確に分類できないこともジレンマであり、原因説明が直接解決につながることも多い。それ故、当該生徒や家庭に寄り添い関わり続けることと、魅力ある学校づくりを進めることで新規の不登校を生まないことが、唯一の解決方法ではないかと思う。

三 魅力ある学校づくり

(一) 居場所としての学級経営

生徒が所属する学級が居づらい場所であっては、楽しい学校生活にはほど遠い。大規模の三小学校から入学する本校にとつて生徒の人間関係づくりは最重要課題である。そのために意図的に生徒を交流させ、相互理解を促す構造的グループエンカウンターは必須であり、年間五回程度・三か年間の計画的な実施が望まれる。また、PDCAサイクルを身に付け自己管理能力を育てるフォーサイト手帳の導入や、毎月のおじめアンケートによる早期発見・早期対応の取組、指示・命令ではなく生徒自身に考えさせ、自己決定を促す生徒指導の推進など、生徒観察を重視しながら、対話のある学級経営に努めさせたい。

(二) 生徒を主語とした授業づくり

指導法改善を進める際、私たちは教師が何をすべきか考えがちであるが、学ぶ主体が生徒であるならば、生徒を主語とした授業づくりを考えるべきではないだろうか

(三) 関係機関との連携と不登校対応職員

学校で抱えきれない課題は多く、関係機関との連携は欠かせない。現在もSSWが中心となり、関係機関との連絡・調整を密にしているが、それだけでは不登校生徒に対応できないのが現状である。また、学校に相談室登校のシステムはあるものの職員は多忙であり、対応に苦慮する現状がある。授業時数の調整や加配教員等により不登校に特化した職員の配置ができると、SSWと協働した小学校・家庭・関係機関との連携が更に充実でき、不登校の解消につながられるのではないだろうか。

四 おわりに

学校に魅力があれば生徒は喜んで登校し、不登校は減少するものと考えられる。生徒を見取る観点は、①学校が楽しいか。②みんな何かをするのは楽しいか。③授業に主体的に取り組んでいるか。④授業はよく分かるかの四点である。この四つが少しでも高くなるように、魅力ある学校づくりを模索したい。



「行きたい学校 笑顔で下校」できる

学校を目指して

牧園小(始) 中園 明 男

一 はじめに

霧島市牧園町は、平成十七年に旧国分市・隼人町・溝辺町・横川町・霧島町・福山町と合併され、北部が高く南東に伸びる霧島山脈の裾野台地に位置している。本校区は、旧牧園町の中心部に位置し、一区から十区の自治会で構成されている。

本校は、令和三年度、学級数七学級、児童数五十四人、PTA戸数三十九戸の小規模校である。

二 学校経営の方針

「豊かな知性と感性を備え、優しい心を持ち、たくましく生きる子どもを育成する。」を学校教育目標に掲げ、「かしこく、なかよく、たくましく」学ぶ姿を目指す子ども像として「生きる力」を備える牧小っ子の育成に努めている。

キャッチフレーズは、「花と笑顔と読書の学校 歌声いっぱい 牧小っ子」である。コロナ禍で以前のように「大きな声で 元気いっぱい」というわけにはいかないが、感染症対策を十分とって、朝の会や音楽集会等でのマスク越しの子どもたちの歌声が、少しず

つ戻りつつある。

三 取組の実際

(一) 牧小よい子の「三つのあ」の実践

○あるき(登下校・ろう下歩行)

○あいさつ(元気で・明るい)

○あとしまつ(あるべき所にあるべき姿で)

基本的生活習慣の定着を図る方策の一つとして取り組んでいる。全校集会や児童集会等の機会をとらえ、呼びかけ・振り返り・実践化を図っている。あたりまえのことがあたりまえにできる児童の育成を目指して、全職員でくり返し指導している。

(二) 「いじめ0(ゼロ)宣言」の実践

みんなが笑顔の牧園小であるために、每学期各学級で取り組んでみたいことを考え、宣言文として児童集会や校内放送等で読み上げ、児童の意識を高める機会としている。また、校長室前や校内に掲示し、見える化を図り、取組が継続するようにしている。

(三) 全職員一体となって取り組む研究の実践

ア 「研究授業」ではなく、授業担当者の「提供授業」とし、全員で授業を考え、授業担当者が代表で授業を提供するという意

識改革を図っている。

イ 授業研究を授業者の指導の良し悪しを議論する場にせず、子どもの姿で研究の効果と方向性を語る場としている。

ウ テーマ研究の研修の最初は、研修係の「小話」やグループで「最近○○だったこと」等、懇談を取り入れていく。「テーマ研究＝難しい」「やらされている」という意識ではなく、研究テーマについて、楽しく前向きに、全員で考えていくという雰囲気づくりを大切にしている。

エ 授業研究の中では出てこない、授業者へのねぎらいや感想、授業者の思いを、事後に交流している。参観者は感想シートに、授業者は思いの丈をA4用紙一枚程度のレポートにまとめていく。職員の間での交流や授業スキルの交流も大切にしている。

四 おわりに

令和五年度に創立百五十周年を迎える本校も少子化の波にはあらがえず、単式学級を編制する学校としては、今年度が最後となる。来年度からは、複式学級を編制する学校として、新たな教育活動をスタートさせる。姿は変われどこれまで以上に全職員で「主体的・対話的で深い学びを実践する」授業の創造に取り組み、自ら学び自ら考える児童の育成に努めていく所存である。



「はつらつと世界に伸びよ下西の子」

下西小(熊) 中村 一成

一 はじめに

本校は、種子島の西之表市街地の南西側に位置し、創立百四十一年を迎える伝統ある学校である。校区内に、日本で最初に甘藷が栽培された所があり、昔から農業の盛んな地域である。近年は市街地郊外として住宅や商業施設も増えている。学校環境は、緑や住宅に囲まれ、静寂で学習に適した状況にあり、校区民の学校に対する関心も高く、PTA活動も活発である。現在の児童数は百三人である。

二 本校の教育目標

本校では、西之表市の教育理念である「ひとりだちの教育」を受け、校訓を表題のとおり定め、学校教育目標を、「夢をもち、自ら学び考え、互いに高め合う下西っ子の育成」として、種子島で育つ子どもたちが、全国どこでも、誰とも関わりたくましく生き抜くことができるようにという願いを持ち、教育活動を推進している。

三 教育目標達成のための取組

(一) 自己肯定感を育む取組

ア 一人一人が活躍できる場の設定

本校は、青少年赤十字に登録し、「気

づき」「考え」「実行する」を行動目標に掲げ、ボランティア活動に自主的に取り組んでいる。また、学校行事の運営や進行など、児童にできることは任せること

によって、成功体験を増やし、児童一人一人が自信を持つことができるよう活動を工夫している。

イ 「よい行い」をしている児童」や「努力している児童」を紹介する場の設定

月一回全校朝会で、「階段掃除を一人で黙々とがんばっている子」「ゴミを拾いながら下校している子」など、担任をはじめ全職員からの情報を収集し、生徒指導主任が紹介している。全校児童の前で名前が呼ばれた児童は、全員から拍手を受け、自分の頑張りが認められとても嬉しそうである。

(二) キャリア教育の推進

ア 「ぴかぴか未来」の取組

キャリアパスポートを活用し、学期一回朝活動の時間に、「自分のことを見つめる場」や「過去の自分を振り返り、未来の『なりたい自分』につなげる場」を

設けている。全学年で継続して取り組んでいくことで、それぞれの学年での自身を振り返ることができている。また、このキャリアパスポートは、中学校へも引き継いでいく。

イ 社会人講話の取組

十一月の県民週間に、低・中・高学年部で、さまざまな職業の方に来ていただき、仕事の内容、仕事をする上で大切なこと、どうしたらその職業につけるかなどを語ってもらっている。今年度は、産婦人科医や理学療養士の方に講話をしていただいた。

ウ ミニ職場体験の取組

六年生が、総合的な学習の時間に、区内の事業所で行っている。昨年度は、コロナ禍で実施が難しかったが、ドラッグストア、保育所、美容院等が引受けてくださった。児童は、働くことの大変さや喜びを直に感じていた。

四 おわりに

今年度の全国学力・学習状況調査の児童質問紙の「将来の夢や目標」の項目で、全員が「将来の夢や目標を持っている」と回答しており、継続した取組の成果が現れている。コロナ禍の中、中止や縮小を強いられる教育活動が多いが、下西の子がはつらつと世界に伸びていくよう、職員と知恵を出し合いながら、下西小ならではの教育を推進していきたい。



豊かな自然や人材を生かして

城上小(北) 前田 望

一 はじめに

本校は明治十二年に開校し、本年度創立百四十二周年を迎えた。現在、学級数八学級(特別支援学級三学級を含む)、児童数四十六人の小規模校である。川内川の支流である高城川が校区を流れ、田畑が広がり、自然環境に恵まれた校区である。

様々な教育活動を通して、子どもたちの自尊心の育成に努めている。

二 取組の実際

(一) 環境を生かした活動

ア いちご農家の協力を得て、いちごの摘み取り体験を行っている。農家のいちご栽培にかける思いを聞き、苦労や喜びを知ることができた。また、いちごを摘み取り、その場で食したり家庭へ土産として持ち帰ったりしている。

イ 学校近くの高城川で、漁業協同組合の協力を得て、うなぎの放流を行っている。

悪戦苦闘しながらうなぎの稚魚を手づかみで放流を行った。子どもたちは、うなぎの生態を学ぶとともに、学校近くの川の恵みについて知ることができた。今年

は、テレビ局や新聞社の取材もあり、学校紹介の場にもなった。

ウ 地域住民や保護者の協力を得て、学校

田で稲の植え付けから刈り取りまでの活動を行っている。子どもたちは、大人に田植えの方法や、刈り取りの際の鎌の使い方など教えてもらいながら作業を行った。一連の作業を通して異年齢でのふれあいの場にもなっている。

農家や漁業組合、地域住民など多くの方々の協力で貴重な体験をすることができている。

(二) 併設幼稚園との交流活動

隣接する幼稚園の園児と小学生が交流する活動を取り入れ、年少者に対する思いや

りの心の育成に努めている。
ア 城上フェスタ

生活科の学習で、自作のおもちゃを使って園児とふれあう活動を行っている。小学生が、自分たちだけで遊ぶだけでなく、園児に遊び方を分かりやすく説明したり、いっしょに遊んだりする場になっている。

イ いっしょに遊ぼう

昼休みに隣接する幼稚園児と校庭で鬼ごっこをしたり、絵本を読んであげたりする活動を行っている。

年少者への思いやりの心の育成の場にもなっている。その他、運動会や学習発表会などの学校行事をいっしょに行っている。

三 おわりに

豊かな自然環境や関係機関の協力を得て、教室では見ることができない子どもたちの一面を知ることができている。

家庭・地域住民に対して積極的に働きかけを行い、家庭・地域とともに子どもたちを育てていくという視点に立った学校運営に努めていくことが肝要かと思う。

また、併設の幼稚園もあり、子どもたちの多様な教育活動を展開できている。今後豊かな自然環境や幼小一体となった教育活動に努めていきたい。



次代を担う人財育成に向けて

加治木工業高 中間 淳一

一 はじめに

本校は、令和二年に創立百十周年を迎えた歴史と伝統を誇る県内屈指の工業高校である。校歌に歌われている蔵王岳の麓に位置し、JR加治木駅から徒歩で七分、鹿兒島空港も近く、陸空の交通の便に恵まれている。

明治四十三年、始良郡立工業徒弟学校として創設され、現在、「自主・向学・勤労」の校訓のもと、建築科、工業化学科、土木科、電気科、機械科、電子科の六学科が設置されている。

卒業生は二万一千人を超え、在校生は伝統を継承しながら日頃から切磋琢磨し、学力の向上、資格取得などにより「将来の生活の基盤を支える力」を、部活動や伝統ある学校行事などへの取組を通して「将来にわたって人生を豊かにする力」を養っている。また、「乱れ0はじめ100笑顔1000」の生徒会スローガンを掲げ、笑顔溢れる明るく元気な学校を目指している。

二 本校の取組

(一) ものづくり

工業系の専門高校として実技教科の延長線上にあるものづくり教育で各学科が特色を出しながら日々技術を磨いている。

百分の一ミリの切削を目指す生徒たちの眼光には、将来を担う技術者の姿を垣間見ることが出来る。また、地元企業の協力を得ながら土木実習における先端測量機器による技術指導など、地元で活躍されているOBの支援もありがたい。

(二) 資格取得

社会で即戦力として活躍することを目指して、始業前から資格取得に挑戦する生徒の姿がある。コロナ禍においてはネット環境を有効に活用した補習体制も構築できた。難関と言われる資格に果敢に挑むことで、チャレンジする大切さを学び、合格時の達成感を味わうことで自己肯定感を養う絶好の機会となる。

(三) 文武両道の推進

近年、企業の求める人財としてコミュニ

ケーション力の高いことが求められている。学校という限られた社会の中で、異年齢の人間関係を構築する生徒会活動や部活動が、その役割を担っている。体育系の部活動に限らず、中学校や企業から依頼を受けて木工製品や電子掲示板を製作するものづくり部の活動など、専門高校ならではの取組も盛んである。

三 結びに

新型コロナウイルスによる影響から生活様式も大きく変わり、地域での行事に参加できなくなった一方、社会インフラのIT化が進んだことで、リモート会議やオンライン授業の可能性が拡大した。「社会に開かれた教育課程」を実現するにあたり、学校だけではなく地域や産業界と目標を共有しながら社会全体で教育活動を展開しなければならぬ。「ものづくりはひとづくり」と言われるように、魅力的で特色ある教育活動を推進して、Society5.0時代を牽引する、次代を担う人財を育成していきたい。





「面授」

市小・中(大) 谷山弘毅

コロナ禍での教育活動が始まって二年が過ぎようとしている。ようやく感染者数も減少の傾向になり、本校では少しずつ可能な限り通常の教育活動へ移行しつつある。

この二年間、学校の教育活動は大きく変わった。人を集めての活動に制限がかかり、それに伴い、行事の変更を余儀なくされた。運動会の半日開催と人数制限、学習発表会の演目変更、交流学习も軒並み中止になった。様々な活動を通して、今しかできないこと、今しか感じられないことがたくさんあったと思うが、それを犠牲にしてしまったように感じて残念でならない。

しかし、様々な工夫により教育活動の幅が広

がった二年でもあった。中でも教育活動のICT化が一気に進み、これにより学習の幅が広がった。今ではすっかりそれを使いこなしている子供たちの姿を見ると、その対応力の速さに驚かされる。「対面での交流ができなければリモートで！」と、離れた学校とリモートで繋ぎ、共同授業を実践した。地域の高齢者の方々ともリモートで繋いでふれあい給食も実施した。高齢者の方々は教育活動の大きな変化に一樣に驚かれた様子だった。

そんな中、以前、先輩から教えていただいた「面授」という言葉が頭から離れない。「人と人が向かい合い、お互いに息づかいが聞こえるような距離で何かを学び何かを伝え、そして何か伝えられる」ということである。本当の学びとはどうあるべきか考えさせられる言葉だ。この二年間、人と人との交流がずいぶん少なくなかった。リモートでの授業も画期的でよいが、やはり、お互い顔をつき合わせて交流学习を進めるのがいい。リモートでは感じられない温もりであったり、息づかいであったりを感じることで、学びもさらに深くなるように思う。これからの教育活動はどうあるべきかは分からないが、まずは、通常の教育活動が早く戻ってくることを切に願うばかりである。

私が大切にしている教え

南指宿中(南) 岡田芳文

これまで多くの先輩、上司に沢山の教えをいただき、今の私がある。私が大切にしている教えの中から、四つの言葉を紹介したい。

「仕事人が人をつくる」

再配の時、新たな仕事を不安がっていた私に先輩がくれた言葉である。それ以来、新たな壁にぶつかる度心の中で呟いてきた。

校長になった今、職員一人一人に必ず重い業務を一つは任せ、成長させたいと心がけている。「負けて勝つ！」

指導主事時代仕えた教育長からの教えである。新たな提案をする時、周りから反対が出ないよう調整した計画など出すものではない。自分が思っている以上に盛り込んだ計画を出すこと、自分がやりたいラインを持っておいて、反対があればそのラインまでは譲歩すればいい。譲歩したことで相手は勝った気持ちになるだろうが、実はこちらの思いどおりなのである。

「引いて 押し返して 横に置く」

教頭時代、仕えた校長が、クレーム対応に苦

慮する私に笑いながら教えてくださった言葉である。クレームはまずは聞くこと。つまり、「引く」。ある程度話を聞いたらこちらの考えを伝える。つまり「押し返す」。でも、完全には押し返さず相手も立てながら最終的にいいあんばいで決着をつけること。つまり「横に置く」。「引いて 押し返して 横に置く」。クレーム対応の極意である。

「揺るぎない信念」

指導主事時代仕えた学校教育課長は、校長先生方に全体の場でも個人的にも、「揺るぎない信念を持って、頑張ってください。」と常に言い続けていた。

校長になった今、事あるごとに心の中で呟いている。「揺るぎない信念！」



『教育は人なり』

国分南中(始) 船倉 文章

「親がいないから言うんだよな。」

いろいろな問題が起きる度、教師は関係する生徒の中から、日頃、問題行動の見られるAくんを疑って注意した。Aくんは児童養護施設に預けられていた。しかし、Aくんにはほとんど落ち度がなかったのだ。

その様子を見ていた級友の一人が家族に吐露した言葉として、その母親が教えてくれたのが冒頭の言葉である。彼は、そのような言動をした教師への信頼が完全に崩れてしまった。そして、二度と学校には行かないと親に伝え、卒業した後も、同窓会があっても学校に戻ることはなかった。

様々な教育環境の中で、子どもに最も影響を及ぼすものの一つが教師であると言われている。そして、子どもの眼差しは、教師の一挙手一投足に向けられている。特に、その言葉や言動に教師が心の奥底にもっているものを見つめ、それを純粹に見て、感じているように思う。そのことを考えると、教師の及ぼす影響はとて大きなものである。

「教育は人なり」と言われる。子どもの前に立つとき、そのような厳肅な思いをもつことの大切さと同時に、自らが人としての更なる研鑽に絶えず励み続けていかなければならないと思う。

「理科の授業が楽しかったから、薬剤師になりました」

大崎中(隅) 竹本 准

教え子の死に直面するときほどつらいことはない。子どもたちの将来を想い、未来への後押しをすることが私たちの仕事だというのに。

私は初任校で職員室の同僚性に恵まれ、生徒との出会いに恵まれていた。理科が好きなき子を増やしたくて導入実験に苦心し、生徒や保護者の期待に応えようと、毎日、がむしゃらに授業の準備をしていた。

生徒が卒業して十四年後に同窓会に呼ばれた。懐かしい顔ぶれ。当時の学校の話、家族や仕事の話に花が咲く。みなそれぞれ自分の人生をしっかりと進めていた。

ある日の校長講話



たのでしよう。

そうですね。みんながお酒だと思って飲んだのは、まったくのお湯だったのです。みんな「自分一人ぐらいならいいだろう。」と瓶に水を入れて持ってきていたのです。お酒を楽しみにしていたのに残念な宴会になりましたね。

さて、みなさんは「自分一人ぐらいなら…」と思ったことはありませんか。「チャイムが鳴るまで遊んでしまった。掃除に遅れるけれどもまあいいか。」とんでもない。あなたが遅れた分、まじめな他のメンバーが、あなたがやらなければならぬ仕事までやらないとその場所はきれいになりません。

「マスクを落としちゃった。どうせ捨てるものだから拾わなくてもいいか。」とんでもない。あなたがポイッと捨てたマスクを「いったい誰が捨てたんだ。」と悲しい気持ちで拾い、ごみ箱に捨ててくれている人がいるのですよ。みんながみんな「自分一人ぐらいなら…」と勝手に行動すると周りの人たちにたくさん迷惑をかけてしまうのです。

あなたが、決まりや約束を守ったり、責任を果たしてくれたりと周りの人はとても幸せになります。何より自分が気持ちよくなるはずですよ。みなさんには、決まりや約束を守れる人、

決まりや約束を守る人、 責任を果たす人

福平小(市) 満枝 賢 治

皆さんは名探偵です。これから話すお話の謎を解いてくださいね。

ある村で、みんなでお酒を持ち寄り、大鍋に入れて飲むことになりました。その中の一人が「たくさんのお酒をもってくる。自分一人ぐらい水でごまかしても分からないだろう。」と悪知恵を働かせ、水の入った瓶を持っていくことにしました。そして、当日、それぞれが持ち寄ったお酒を大鍋に入れ温めました。「お酒も温まり、いよいよ宴会の始まりです。」と乾杯だ。」ところが、一口飲んだみんなの顔色が変わりました。なぜ、みんなの顔色が変わっ

その翌年、教え子が突然亡くなったという知らせを受けた。牧場主の息子だった。テレビ局に入って活躍し、牧場を継ぐために帰郷して結婚したばかりだった。突然の心臓発作だったという。その教え子の姉も、私の教え子で、二人共とても優秀な生徒だった。通夜でお母さんと姉は「先生、ほんとにごめんさい。これから赤ちゃんも生まれるというのに、弟はこんなに簡単に死んでしまい、お嫁さんを悲しませるなんて。」と嘆いていた。誰しもいつかは必ず死ぬ身だ。彼は当時に精一杯生きてきたのだと思う。ただ、彼は死ぬにはあまりにも若く、突然であった。

悔やみの後に姉と話をした。「先生の授業が楽しかったから私は理系に進み、薬剤師になりました。」姉の言葉は、気落ちする私に気を遣って咄嗟に何気なく言ったことなのかもしれない。しかし、私は自分の仕事が真に認められたように感じて、うれしかった。教師になって一番つらかった日に、一番うれしい言葉をもたらした。教職では百のうち九十九の大変なことやつらいことがあっても、それがすべて吹っ飛んでしまふような一があるものだ。これまで出会ってきた生徒からもらった言葉を一つ一つ思い出すと、そんな思いに至った。

責任を果たせる人、そんな格好いい人になってほしいです。

次回は「自分だけじゃないもん。」「○○さんもやってたし。」について考えてみましょうか。

「自分の生き方は自分で決める」

野里小隅（小 倉 康 夫

今日は私が尊敬する男の人の話をします。その人の名前は、ファルーク・バルサラさんと言います。アフリカのタンザニアのザンジバルという島で生まれました。小さいときからピアノを習い、歌うことが大好きでした。

ファルークさんは、タンザニアで争いが起これ、命の危険があったので、家族でイギリスに渡ります。ファルークさんは、よその国から来た「移民」ということで、差別を受けます。

でも、ファルークさんは、へこたれませんでした。好きな音楽に打ち込みました。そして三人の仲間と出会い、音楽グループを作りました。自分の名前をフレディ・マッキーリーに変え、グループの名前はクイーンとしました。ク

イーンの四人は、素晴らしい曲をたくさん作りました。そして、フレディさんのことを「移民」と差別する人はいなくなりました。

しかし、フレディさんは、別の差別を受けるようになりす。それは、「性的少数派（LGBTQシヤルマイノリティ）」ということからです。

そのことで、陰口を言われたり、事実ではないことを雑誌に書かれたりしました。くじけそうになりましたが、フレディさんは、仲間と音楽を作り続け、ライブで大活躍しました。

移民の差別、性的少数派の差別を受けても乗り越えてきたフレディさんでしたが、新たな差別にさらされます。それは、今から四十年ほど前、死の病と怖れられていたエイズという病気にかかったことでした。当時エイズにかかった人と接すると、エイズがうつってしまうのではないかと誤解され、患者さんは差別されていきました。フレディさんは、このエイズ患者になったのです。

日に日にやせ衰えていくフレディさん。それでも、エイズにかかったことが分かってから四年間、人々に愛される音楽を作り続けました。

今から三十年前の一九九一年十一月二十四日にフレディさんは、亡くなってしまいました。まだ四十五歳という若さでした。世界中の人々

が、その死をいたみました。

フレディさんは、様々な差別にいましたが、最後まで自分らしい生き方をしました。そして、フレディさんが仲間と作った曲は、今でも世界中の人々から愛されています。

「普通じゃない」

何が基準で決めてるの」

古仁屋中（大） 岩 城 靖 一 郎

この標語は、令和三年度瀬戸内町人権標語コンクールで、最優秀賞に輝いた本校生徒の標語です。これからの考え方の道しるべとなる素晴らしい標語と紹介しました。

「ハッ」としました。これまでの私自身の考えを改めさせてくれました。「普通じゃない姿・行動・考えを決めつけていたのでないだろうか？」

「普通の基準って何？」この疑問こそが、人権を考える上で、人を思いやる上で、大切にないと考えられました。

私たちの周りには、様々な人権課題があります。何が自分と違うのか？普通じゃないのか？

この標語は、はじめ、偏見、差別等、「自分と違う」ことにとらわれた行動に対する解決の糸口になると思います。人にやさしく、人を思いやる心を考えていきたいですね。

もう一つ、本校生徒の地区読書感想文コンクール特選に輝いた感想文を紹介します。

「五体不満足 著者 乙武洋匡」と出会い、感じたタイトル「一つの境界線」の一部です。

【私は今まで、障害者と障害のない人で境界線を引いてしまっていた。だが、障害者であることが障害者でなくても、一人の人間であることに変わりはない。障害者という一つの「くくり」が、差別や偏見を生むのだと私は思う。

「障害者を障害者として捉えるのではなく、「一人の人間」として尊重することが、これからの時代大切になると思う。私自身も乙武さんのように挑戦し、たくさん体験して諦めずにこれからの人生を歩んでいき、「自分なりのドラマ」を造っていく。」

私自身も、心の中で、境界線やくくりをなくし、「一人一人は違うけれども、みんな同じ人だから」と感じることを大事にしていきたい。



掃除で悟りを開いた仏陀の弟子

周利槃特

本城小(始)

吉田 康孝

周利槃特に纏わる話である。

槃特は残念なことに、自分の名前すら、忘れるほどで、修行を共にする仲間からも馬鹿にされる有様であった。槃特はあまりの自分の愚かさを嘆き、仏陀のもとを訪れる。「どうかお釈迦様、愚かな私をお救いください。」自分の無力を心底恥じ、涙ながらに訴える槃特に、仏陀が心優しくこう応える。「自分を愚かだと知っている者は愚かではない、自分を賢いと思いつている者は愚か者である。」そして、さらに仏陀は、こう槃特に問いかける。「おまえの一番の取り柄はなんだね。」仏陀の問いに、しばしの沈黙の後、槃特は「掃除です。」

と答えた。「そうか、その取り柄とする掃除をしながら、『塵を払い、垢を除かん。』この教えをおまえの得意とする掃除の際に繰り返し唱えなさい。」

槃特は、仏陀の教えを、ついつい忘れそうになる自分を必死に励まし「塵を払わん、垢を除かん」と繰り返し唱え、ほうきを手に掃除を続けた。五年、十年、二十年、ただひたすらに仏陀の教えを信じ、心惑うことなく修行を重ねる。その姿に、初めは馬鹿にしていた周りの弟子たちも、次第に槃特に一目置くようになった。そして、ついに槃特は仏教という「阿羅漢(アラクハン)」の境地に達する。「阿羅漢」とは、厳しい修行を積み重ね、心の汚れや曇りを削ぎ落とし、第一段階の悟りを得ることだそうである。さらに、仏陀は悟りについて「悟りを開くということとは、何も多くの知恵を身に付けるということではない。たとえわずかなことでも、徹底して行うことが大切なのだ。」とも言われている。

不思議とこの話を思い出すたびに私は、心が救われ、穏やかな気持ちになる。人間誰しも、よい時ばかりとは限らない。自己の無力を知り、絶望を感じることもしばしばである。それでも前に進んでいかなければならない。私は、この話に人生の早い時期に出会えたことを、とてもありがたく感じている。「塵を払い、垢を除かん。」一つのことを一途に繰り返し、ほんのわ

ずかでも成長する己の姿に希望を抱き、さらにその微々たる成長が、目の前の子供たちの未来に少しでも役立つことを願い、残りの教職生活を全うしたいと願っている。

「人・もの」の すばらしさ

龍瀬小(大)
堀内 俊 勝

平成十二年度から十七年度までの六年間、二町の派遣社会教育主事として勤務させていただきました。

年間の経験は、学校を外から見たり、学校から離れ、多くの人やものに関わったり、とても貴重な六年間となった。

特に、最初のA町においては、全ての業務が初めてのことばかりで、企画・立案の起案の仕方から、公文書の書き方、予算の立て方、行政職を行う上での心がまえ等、町教育委員会の上席から御指導いただいた。今振り返ると、この時、多岐に渡って御教示いただいたことが、自分の見方・考え方や軸足の置き方、仕事の進め方等、様々な面で一つの土台となっているように感じている。そして、この六年間、役場職員の方々をはじめ、多くの町民の方々や、それぞれの地域にある豊かな自然・歴史・文化等、多くの人・ものに関わりを持たせていただいた経験も、私自身の大きな財産となっている。

社会教育を推進する中で、強く心に残っていることが二つある。一つ目は、「マン・パワー」と「チーム力」。目的達成に向けて、様々な世代の方々が、自分のスタイルや持ち味を生かし發揮しながら、協力し合って生き生き活動される姿が、まちの様々なところにあることに気付かされ、勇気や元気が湧いてきた。一人一人がもっている「マン・パワー」、さらに、「マン・パワー」を生かした「チーム力」。人がもっている力やチームがもっている力の大きさや凄さを実感させられた。

二つ目は、ふるさとへの「愛着」と「誇り」。そこに住む人、そこにある自然・歴史・文化はそれぞれの場所の違い、そして、時の流れは変化しても、人々の心には、ふるさとへの「愛着」と「誇り」がしっかりと根付いていることを見聞させていただいた。また、ふるさとへの「愛着」と「誇り」が人の心を動かし、人をまとめる大きな力であることも実感させられた。

これからの学校教育には、「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」という目標を学校と社会が共有し、連携・協働しながら、新しい時代に求められる資質・能力を子どもたちに育む「社会に開かれた教育課程」の実現が求められている。

「地域の中の学校」として、本校の子どもたちにも求められる資質・能力とは何かを社会と共有する態勢づくりをどうするか、そこにある地

域の人・もののもつ力はどんなものがあり、どう生かしていけるのか、人的・物的な体制をどう確保していくのか等、今後、カリキュラム・マネジメントの充実を図りながら、更に、「自ら気付き、考え、行動できる心身ともにたくましい龍瀬っ子の育成」を目指した学校教育の質の向上に努めていきたい。

SDGsと

共生社会の実現

加治木養護

徳 永 謙 一

高校時代の生物の教師曰く、脳の発達は二十歳まで、それ以降は、退化していくと。

けれども、最近の脳科学の進歩は目覚ましく、人間の脳は、六十歳代まで進化し、特にそれまでに蓄えた知識や経験を基にして、様々なトラブルへの対処法や人の資質を見抜く力につながる連想記憶力が、ピークに達するそうである。(黒川伊保子氏講演会より)

だから、単純記憶力は衰退の一途をたどるが、そこはこまめにメモを取ることで凌ぎ、危機管理能力を高め、周囲の人物の資質向上に寄与していくことが、私たち校長の職務なのだろうと納得した次第である。

また、学校経営方針や学校ビジョン等に自分の想いを反映させようとするならば、そこ

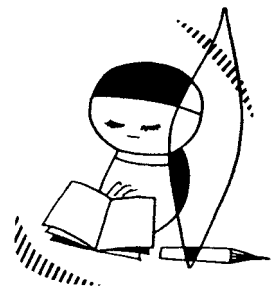
には自ずと自分がこれまでに係わってきた教職生活での有り様が投影されていく気がする。たとえ借り物であつても、それを実現したいと思う信念が、周囲の共感を得て行動に現れる。自分自身の確固たる信念、教育に対する哲学が求められる所以であると思う。

教育は、これからの未来を担う子供たちを育んでいく営みである。子供たちは未来の宝である。

コロナ禍でコミュニケーションが取りにくい現在であるが、人間は社会的な動物であり、周囲との関わり無しでは生きていけない。本校の子供たちも感染症には万全の備えをしながら、その持てる力を遺憾なく発揮しようと頑張っている。遅ればせながら、SDGsを来年度の学校経営方針に位置付けようとしているのも、共生社会の実現を願つての判断である。

誰もが生きやすい世の中、高齢者や社会的な弱者と言われる人たちを含む、全ての人たちの人権が尊重され、多様性が認められ、生きていくことに「誇り」と「喜び」を感じられる社会。共生社会の実現を目指して具体的な目標を明確に定め、挑戦していくことにより、智慧（ちえ）が沸き、創意工夫が生まれる。お互いに影響を受け合いながら、周囲の人たちに対して感謝することができる、そんな「豊かな心」を育むことが教育の本質であろうと思う。

読書案内



■ ANAビジネスソリューション 著

ANAの口ぐせ

今和泉小(南) 平川了二

いじめや不登校の解決に向けた取組や学力向上に向けた取組など、学校が抱える問題が複雑化・多様化する中、様々な課題解決を教職員一人一人の力量のみに委ねるのではなく、学校の運営体制を見直し、組織として対応していくことが一層求められている。本校にも、心の教育推進委員会や学力向上対策委員会などの各種委員会が校務分掌に位置付けられているが、それらの各種委員会を一層活性化できないかと悩んでいた時に「どんな問題もチームで解決する」と書かれた表紙に興味を惹かれて手に取った本である。

民間航空会社であるANAでは、「自分の仕事じゃないから、まあいいか」ではなく、気付いた時に、気付いた人が掛け合う「あれっ、大丈夫」という言葉や「小さいことほど丁寧に、当たり前のことほど真剣に」が社員の口ぐせになっているそうだ。自分のことだけに注意を払うのではなく、仕事を一緒にする仲間にも注意を払うことや、「信頼は当たり前なことを真剣にやり続けることでしか得られない」という考えが徹底されている。また、「お客様がどう感じるか」が判断基準であることを社員全員が認識しているらしい。

そのような共通の認識を社員に持たせることの大切さや、組織で動くための仕組みや、人を巻き込むための方法などが紹介されている。

利用者の命を守るとともに、充実したサービスで利用者の満足を得て利益を上げなければならぬ企業取組だけに説得力を感じる。

学校経営を担う校長として、子どもたちが笑顔で毎日登校できる学校にするためにも、また一人で課題を抱え込み大きなストレスを感じて「自分は教員に向いていない」「もう教員としての仕事をやめたい」と思う職員を出さないためにも組織の活性化に取り組む必要性を改めて感じた。

株式会社KADOKAWA 価格一四〇〇円

■大村 はま 著

教えるということ

神山小(隅)末 吉 理恵子

教職に就いてまだ間もないころ、教頭先生に薦められた一冊である。大村はま先生といえはほとんどの先生方が御存じかと思うが、昭和の初めから七十三歳になられるまで、国語教師という仕事を職業意識に徹して貫かれた先生だ。この本は講演会の内容をまとめたもので、昭和四十八年に第一刷が発行され、その後何度も再版されて今でも読み継がれている。昭和、平成、令和と時代は移り、教育に対する考え方や指導法が大きく変化しても、「本物の教師」であるための根本は変わらないということを再認識することができる。

教諭時代にこの本に出会ってから、授業中の「わかりましたか。」「静かにしなさい。」は禁句にしようと思った。教師として未熟な自分にとつて、とても難しいことであったが、子供が自ら夢中になるような授業を目指して教材研究に励んだ日々は、教師としての喜びと、少しの自信を感じることができたときでもあったように思う。

「研究することは『先生』の資格」という項がある。「研究というのは、伸びたいという気持ちがたくさんあって、それに燃えたいとできないことなんです。少しでも忙しければ、すぐおやすみになってしまいます。」授業準備をなまけそうになる度にこの言葉が頭に浮かんでくるものだった。

最近の小学生の意識調査で、「尊敬している先生はどのような先生ですか」の問いに一番多かった答えは、「授業（教え方）が分かりやすい先生」だったそうだ。若い先生方に「教師は授業で勝負」を伝えるのにも役立つ一冊ではないかと思う。教師が子供たちにとって憧れの職業であってほしいと願う。

共文社 七五〇円



■アンジェラ・ダックワース 著

GRIIT やり抜く力

串良商業高 有馬 敏和

「自分には才能がない、と嘆いている人におすすぬ」という謳い文句に誘われてつい手に取った本、それがこの本である。才能よりも大切なものがある。そんなことを教えてくれる本である。私たちは、成功している人を見ると、それは元々才能があったからだろうと思いがちである。しかし、そうではないと。

世の中には、生まれもった才能や素質はそれほどではない？（私よりは相当ある）が、成功者と呼ばれる人が多くいる。そんな人たちに共通する要因の一つが「GRIIT」（グリット）なるもの。

「GRIIT」とは、
G (Guts) … 困難に挑み、逆境にたじろがない勇氣
R (Resilience) … 挫折から立ち直る力

I (Initiative) … 率先して物事に取り組む力

T (Tenacity) … どんなことがあっても

も物事に集中し続ける能力

この四つの単語の頭文字で、誰もが生まれてから身に付けられるスキルだということだ。成功する人に共通する特徴は、「情熱」と「粘り強さ」、つまり「やり抜く力」をもっている。

どんな天才でも、一日や二日で成功を収めてはいない。それは昨年の東京オリンピック・パラリンピックをみても然りである。一年、二年と年数を重ね、数年または数十年、困難な場面に遭遇してもそれを乗り越えて成功を自分ですかんでいる。自分に才能があっただけではなく、とことんやり抜く力があつたからこそ、そこに到達し成功をつかみ取れたのだろう。

才能よりもやり抜く力がとにかく大切なのだ。しかし、当たり前のことを持続してやり続けることは、今までの経験上から大変なことであり、分かっているにもかかわらず実践できない。ならば、どうするか。自分でできる些細なことを少しずつでもよいから始め、スモールステップで小さな成功体験を積み上げていくしかない。そして、失敗してもくじけず懲りずにチャレンジし続けていく。改めてそう思った次第である。

ダイヤモンド社 一七六〇円

謹んで新春の お慶びを申しあげます

皆様のご健康とご多幸を心からお祈りいたします
本年もどうぞよろしくお願ひ申し上げます

令和四年 元旦

本年予定されている周年

札幌オリンピック開催五十周年（二月）

あさま山荘事件から五十周年（二月）

東海道新幹線で「のぞみ」運行開始から三十周年（三月）

沖縄が本土復帰（沖縄返還）から五十周年（五月）

関門鉄道トンネル開業八十周年（七月）

日中国交正常化五十周年（九月）

日本の鉄道開業百五十周年

本年予定されているできごと

四月一日 成人年齢が十八歳に引き下げ

七月中 第二十六回参議院議員通常選挙

西九州新幹線（九州新幹線西九州ルート）開業予定

十一月八日 日本全国で皆既月食が観測可能

学生時代、遠い昔のことなので、どのような出会いだったのかは忘れてしまったが、「民俗」に興味を惹かれた。ただ、「学」が付くほど専門的なものではない。鹿児島県内どこであっても、昔から伝わる習慣や風習、伝統が多くあるはずだし、子供の頃から何かしら接してはいたのではないかと思うが、あえて意識したのはその時であった。

小正月に大口市へ出かけた。塩餅を柳の枝に刺して馬小屋に飾る。この日は男性が料理をし、女性を休ませる。料理の際は包丁を用いないため、鍋には大根や人参がまるごと入っている。食べる箸は柳の枝を切り出したもの。一度箸でつかんだ物は、食べきらなければならぬ。水害を招くとされるため、食事の途中で水やお茶を飲むではない。食事が終わったら肘を枕に横になる。その姿は、たわわに実った稲を表す。夜になると子供たちの「もぐら打ち」が始まる。先端に藁縄を巻き付けた竹の棒で、「もぐら打ちちゃ咎なし」と歌いながら家々を回っていく。各家からお札に果物や菓子をもたらす。初めて見たのだが、一連の行事に温かさや懐かしさを感じた。これが、民俗の旅のきっかけである。

これまでの異動で、ほぼ県内全域を回った。では、民俗の旅の思い出を少し：

奄美大島に赴任して間もなくの旧暦三月三日（サンガツサンチ）は午前授業給食無しであった。「加計呂麻に行くので、二校時で帰ります。」という子供もいる。「浜下り（ハマウレイ）」が

趣味・文芸

民俗の旅

金岳小(熊)

あるという。この日は、みんな海へ行き、足まで海へ浸かる。中には泳いでいる人もいる。楽しそうに潮干狩りをしている。砂浜では、お重を広げて食事が始まる。口々に「カラスにならないように。」と言っている。茹でたてのテラジャは最高だった。

鹿児島市の「破魔投げ」は、薩摩藩の伝統遊戯である。単純で簡単なルールではあるが、やってみるとなかなか難しい。教わったルールと違う判定や掛け声には戸惑った。

鹿児島市の対岸、垂水市杵原地区の「おろごめ」は、島津藩主への献上馬を穴（おろ）へ追

い込んだことが由来とされている。男児の強靱な成長を祈願したものである。夜明け前の松明の行進は、幻想的であった。先輩が後輩に教えながら海岸に穴を掘る作業は、郷中教育の名残であろう。児童数の減少で、実施の日時や方法を変えながら継続している。

県内各地に「田の神」がある。日置市吹上町中田尻の田の神は、僧衣立像の中でも、最も古いものらしい。田の神は、前面は五穀豊穡、後ろ姿は子孫繁栄と言われるが、後ろ姿の写真にはなかなか出会えない。後ろ姿を見るには直接行くしかない。見るとなるほどと思う。

島津忠良が加世田別府城を攻略した際、諏訪神社（南方神社）に奉納した「伊作太鼓踊り」は、

村上善成

五百年以上もの伝統がある。六つの保存会での輪番であるため、私たちが勤務している期間に出会えないこともある。私は、運よく奉納の年に出会い、踊らないかと声を掛けていただいた。ただ、五十を過ぎて体力も衰えてきている。命に関わるからやめた方がいいと言っている。しかし、折角の機会でもあるし、この歳になって何かに挑戦するのもおもしろい。「ズータコズータコズータコ」というリズム、表か裏かどこで太鼓を打っているのか分からない。口伝えと暗号のような説明書き、動かない自分の体にも苦労した。「動きが違う。」と叱られた。「動きが軽快だ。」と褒められた。叱られても腹が立ったりへこんだりすることはなかったが、やはり褒められるとうれしかった。八月末の猛暑の中、約二十キロの装備で、早朝から夕方まで踊り続けた。一日目の夜に点滴を打つことになったが、「シヨツシヨイ」の掛け声で、なんとか二日間踊りきることができた。この地を離れるとき、「大事な踊り子だ。」と言っていた。現在、二年間中止になっている。所属する保存会は、再開して六年後であるため、年齢的にもう踊ることはできないだろう。ご恩返しに、何か手伝えることがあればと再開を楽しみにしている。

ここ口永良部島では、二年ぶりに棒踊り・日の本踊りが奉納された。島民は少なくなつたが、継承されている。伝統芸能を楽しんでいる様子に、この島の将来が期待される。



ジオ！桜島

（桜島の魅力再発見）

桜島中(市) 川畑 哲也

一 はじめに

本校では、総合的な学習の時間を「桜島タイム」と設定して、桜島の自然・歴史・観光・産業や雲仙普賢岳などの他火山との比較等について学習し、三年時には、その集大成として、来島者向け観光ボランティアガイドの取組を実践している。本年六月には、その一環として、外部講師による講話があり、桜島について改めて学ぶ機会を得た。

二 桜島の概要（歴史・自然・観光・産業）

「桜島」と言えば、県民誰もが知る鹿児島県のシンボルである。海を挟んで鹿児島市街地とは4kmほどしか離れておらず、活火山と六十万都市が共生している鹿児島市は、世界的にも珍しい場所である。

桜島は、今から約二万六千年前頃、始良カルデラの南のふちに海底噴火が起こり誕生し、噴出物を積み重ねて北岳が形成された。

北岳の活動が終わってからさらに約五百年後、南岳が北岳を覆うように形成され、現在の台形のような形となった。そのため、見る場所で桜島の姿が違うのである。

桜島の度重なる噴火の歴史は、植生にも影響しており、火山による溶岩や火山灰等により、植物の破壊と復旧が繰り返されてきた。

そのため、桜島では、裸地にコケ類などの植物が侵入してから、緑豊かな森林になるまで最低五百年かかるという植物の移り変わりが島を一周するだけで見ることができ、天然の博物館とも言えるのである。

観光面では、朝・夕、季節ごとに色を変える桜島には、湯之平展望所をはじめとする絶景スポットや黒神埋没鳥居、溶岩なぎさ遊歩道、桜島溶岩なぎさ公園の足湯など、雄大な自然を満喫できる名所が数多くある。

桜島は、旧桜島時代の頃から観光に力を入れており、二十四時間営業の桜島フェリーや桜島一周定期観光バスなど、観光地としての整備に積極的に取り組んできた。また、火山研究でも世界最高レベルの観測体制が整備されており、桜島国際火山砂防センターでは、火山噴火



三 ジオ！桜島

の仕組みなどのパネル展示や土石流対策としての砂防事業について学ぶことができる。近年では、天然温泉掘り体験や火山砂防トレッキングなどの体験型ツアーも企画され、県内外から修学旅行も誘致している。

産業面では、桜島名物である「世界一大きい桜島大根」や「世界一小さい桜島小みかん」をはじめ、火山灰や火山ガスにも強いヤブツバキから取れる「椿油」など、数多くの観光資源を有効に活用している。

太古の始良カルデラによって形成された桜島・錦江湾エリアは、二〇一三年に、日本ジオパークに認定され、桜島への関心はますます高まっている。

ジオパークとは、「地球・大地（GEO・ジオ）」と「公園（PARK・パーク）」を組み合わせた言葉で、「大地の公園」を意味する。大地の形成、植物遷移の様子、温泉や特産物などの産業やそこに暮らす人々の文化に触れることができる桜島は、まさにジオ（地球）の魅力をまるごと味わうことのできる場所である。

〔参考文献等〕

桜島大正噴火百周年記念誌（桜島大正噴火百周年事業実行委員会）、「みんなの桜島」（NPO法人桜島ミュージアム）、「ふるさと桜島」（桜島町教育委員会）

*** こころの詩 ***

お化け

冬は

夜になると

うつすらしい気持になる

お化けでも出そうな気がしてくる

冬

ながいこと考えこんで

きれいに諦めてしまつて外へ出たら

夕方ちかい樺色の空が

つめたくはりつめた

雲の間に見えてほんとにうれしかった

八木 重吉

一般財団法人校長会館だより

校長異動

○新任 令和四年一月一日付

南さつま市立金峰中学校長

石畑 浩一 氏

(前鹿児島市立鴨池中学校教頭)

教育長異動

○新任 令和三年十二月二十日付

十島村 木戸 浩 氏

(前霧島市立宮内小学校長)

季節の言葉「蕪村忌」

蕪村忌に呉春が画きし蕪かな 正岡子規

江戸時代中期の俳人・画家の与謝蕪村の忌日。旧暦十二月二十五日。蕪村の画号「春星」にちなみ「春星忌」とも呼ばれる。

江戸俳諧の巨匠の一人であり、江戸俳諧中興の祖と言われる。また、俳画の創始者でもある。

有名な句に「春の海終日のたりのたり哉」「菜の花や月は東に日は西に」などがある。

編集

後記



今年は十二支で言えば、寅年。寅は決断力と才知の象徴だそうです。十干でいうと壬となり寅寅は、厳しい冬を越えて芽吹き始め新しい成長の礎となるイメージを持つそうです。今年こそは、コロナ対応に追われることのない新しい時代の到来に期待したいものです。

さて、本校校長室の入口上方には「和顔愛語」と書かれた達筆な浄書が掲げてあります。「先意承問」という言葉が続くのですが、「和顔愛語 先意承問」で和やかな顔と思いやりの言葉で人に接し相手の気持ちをいたわり、察して、相手のために何ができるか自分自身に問いただすことという意味になります。辛い時や嫌なことがあった時、愚痴をこぼしたくなる時にこそ自分から笑顔と優しい言葉で周りの人に接しようとする姿勢、それが「和顔愛語」です。笑顔で相手に優しい言葉をかける。↓相手がその言葉によって心が明るくなり、幸せを感じる。↓自分が幸せであるだけでなく、周りの人も幸せにしていると感じる。↓その行動や言葉が、また自然と周囲の人々のところを明るくする。↓分け隔てなく、優しく、平和な世の中になる。↓そんな世の中を生きる自分の心も幸せになる。いかがでしょう。みんなが「和顔愛語 先意承問」を心掛ければ、心がまるくなり、笑顔が循環する素敵な世の中になると思いませんか。そんな世の中づくりのヒントとなる玉稿を今号もお寄せいただきました。皆様方に厚く御礼申し上げます。

長崎伸一(南中学校)